

「時は近づいている」

イントロダクション

1. 私の経験

- (1) 1967年の第3次中東戦争
- (2) 救われてから、なぜクリスチャンはイスラエルに関心がないのか疑問に感じる。
- (3) 個人の救いを聖書のゴールと考えている。
- (4) 聖書のゴールは、神の栄光である。神の約束はすべて成就する。

2. 時代を読む

- (1) 世界が激変しつつある。東西冷戦の終結、経済成長の鈍化、地球環境問題。
- (2) 日本も激変しつつある。
 - ①世界の変化についていけない日本
 - ②中央集権制からの脱却
 - ③自立と共生がキーワード
- (3) 信仰を、点や線としてではなく、面として捉える。
 - ①歴史の文脈を考える。
 - ②世界観の問題として信仰を考える。

3. 聖会のテーマの展開

- (1) 的を外したユダヤ教
- (2) 的を外したキリスト教
- (3) 的を外したイスラム教
- (4) イスラエルの祭りとメシアの働き (春の祭り)
- (5) イスラエルの祭りとメシアの働き (秋の祭り)

I. 的を外したユダヤ教

1. 啓示について

- (1) 神が語り、それを聞いた人が記録に残す。
- (2) 「靈感 (Inspiration)」とは、書かれた内容を保証する概念。
- (3) 歴史の中で神が語った。漸進的啓示 (Progressive Revelation)。
- (4) 新しい啓示は、それ以前に与えられた啓示によってその意味を解釈する。
- (5) 聖書は、1600年以上にわたって、40人以上の人々によって書かれてきた。
- (6) ユダヤ教には旧約聖書という概念はない (新約聖書を認めていない)。
- (7) キリスト教は、旧約聖書と新約聖書を一貫した聖典と見る。

2. 聖書に記された8つの契約について

(1) エデン契約 (条件付)

創 1 : 28~30、 2 : 15~17

(2) アダム契約 (無条件)

創 3 : 14~19

(3) ノア契約 (無条件)

創 9 : 1~17

(4) アブラハム契約 (無条件)

創 12 : 1~3、 12 : 7、 13 : 14~17、 15 : 1~21、 17 : 1~21、 22 : 15~18

(5) モーセ契約、またはシナイ契約 (条件付)

旧約と呼ばれる契約はこれである。

出 20 : 1~申 28 : 68

(6) 土地の契約 (無条件)

申 29 : 1~30 : 10

(7) ダビデ契約 (無条件)

Ⅱサム 7 : 11b~17、 I 歴 17 : 10b~15

(8) 新しい契約 (無条件)

新約と呼ばれる契約はこれである。

エレ 31 : 31~34

3. アブラハム契約の継承者は、イサク、ヤコブ、そして12人の息子たち

(1) 子孫の約束 → ダビデ契約でより明確になる。

①メシアの家系が特定される。ダビデの子孫。

②王座は永遠に確立される。 → メシアの再臨と千年王国の希望

(2) 土地の約束 → 土地の契約でより明確になる。

①所有権は、アブラハムとその子孫に与えられている。

②その土地に住めるかどうかは、ヤハウエの命令に忠実であるかどうかで決まる。

③この原則は、今日に至るまで生きている。

* 族長たちの時代 マクペラの墓地、シェケム、いくつかの井戸 (増)

* エジプトで奴隷となる時代 (減)

* 出エジプトとカナン征服の時代 (増)

* 士師記の時代 (増減を繰り返す)

* 王制時代 (増)

* 南北朝時代 (減)

* 北王国イスラエルがアッシリヤ捕囚となる時代 (減)

- *南王国ユダがバビロン捕囚となる時代 (減)
- *補修からの帰還 (増)
- *ハスモン王朝時代 (増)
- *ローマによる支配の時代 (減)
- *紀元 70 年、エルサレムの崩壊と世界へのユダヤ人の離散 (ゼロとなる)
- *19 世紀末からのシオニズム運動の高まり
- *ホロコースト
- *1948 年、イスラエル共和国建国 (増)
- *それ以降、今日に至るまで、土地は増減を繰り返している。
- *今後も同じパターンが続く。

(3) 祝福の約束 → 新約でより明確になる。

- ①新約は、第一義的にはユダヤ人と結ばれたものである。
- ②ユダヤ人に与えられる祝福が、異邦人にも与えられる。
- ③アブラハム契約が結ばれた当初から、異邦人の救いが想定されていた。

4. ユダヤ教の聖典

(1) 聖書 (いわゆる旧約聖書) (タナハと呼ぶ)

- ①トーラー (モーセの 5 書)
- ②ナビイーム (預言書)
- ③ケトゥビーム (諸書)

(2) ミシュナ

- ①前 5 世紀から紀元 2 世紀までの法の解釈と口伝律法の集成
- ②バビロン捕囚からの帰還以降の現象
 - *律法学者のエズラによる宗教改革
 - *本来のモーセの律法 (613 の命令) に細則が付加される。
 - *紀元 1 世紀のタンナイム (賢人)、ヒレルとシャンマイの解釈が中心。
 - *イエスと律法学者の論争は、ミシュナ法をめぐるもの。

③ユダ・ハ・ナシが 2 世紀に編纂し、成文化した。

(3) ゲマラ

- ①アラム語で完了の意味を持つミシュナの注解書。
- ②パレスチナ系のゲマラは、390 年テベリアで編纂された。
- ③バビロニア系のゲマラは、500 年ごろに編纂された。

(4) タルムード

- ①前 5 世紀から 1200 年をかけて議論してきた律法解釈の集大成。
- ②ミシュナがその中心にあり、ゲマラと中世以降のラビの注解が加わる。
- ③エルサレム・タルムード (5 世紀) とバビロニア・タルムード (6 世紀)

*後者は、アラム語とヘブル語で書かれており、分量は前者の3倍。

*普通タルムードとは、バビロニア・タルムードを指す。

④ユダヤ教はミシュナ法（タルムード）によって本来の啓示宗教から逸脱した。

(5) ラビ（教師、律法学者）の存在

①紀元70年以降、祭司階級を中心としたサドカイ派は消滅する。

②神殿を失ったユダヤ教は、ラビ的ユダヤ教として発展していく。

③つまり、パリサイ派のユダヤ教である。

④現代のユダヤ教正統派は、パリサイ派の子孫と考えて間違いない。

*聖書の学び（暗誦）は10代で終え、残りの生涯はタルムードの学びに専念する。

*暗誦していることと、理解していることとは別である。

*一般のユダヤ人はラビ・コンプレックスのゆえに、ラビの意見に盲従する。

5. エルサレム陥落以降のユダヤ教

(1) ユダヤ人のアイデンティティが守られた理由

①安息日、祭り、食事、服装

②エルサレム帰還という夢

③そして、迫害

(2) ディアスポラの地で、ユダヤ教は状況に適応していった。

①正統派

②改革派

③保守派

II. 的を外したキリスト教

1. キリスト教はユダヤ的ルーツを持つ宗教である。

(1) イエスはユダヤ人であり、ユダヤ人のメシアとして来られた。

(2) 12弟子たちも全員ユダヤ人であった。

(3) 初代教会は、ユダヤ人の共同体であった。

2. 救いの教理

(1) イエスは神の子（三位一体の神の第2位格）であり、メシアである。

①神の複数性は、旧約聖書で啓示されている。

(2) イエスの死は、「世の罪を取りのぞく神の小羊」としての死である。

①受難のしもべとしての啓示を最も鮮明に語ったのは、預言者イザである。

②イエスをメシアとして信じることは、ユダヤ人として当然のことである。

*律法が与えられた目的を誤解していたユダヤ人は、信じなかった。

*ミシュナ法を守っていたユダヤ人も、信じなかった。

*既得権益を守ろうとしていたユダヤ人も、信じなかった。

3. 異邦人教会の発展

- (1) エルサレム、ユダヤ、サマリヤ、地の果てまで、という順番がある。
- (2) 最初の異邦人信者は、ローマの百人隊長のコルネリオ。
- (3) 最初の異邦人教会は、アンテオケ教会。
 - ①クリスチャンというあだ名が生まれた教会
 - ②異邦人宣教を開始した教会
- (4) エルサレム会議（使 15 章）で、異邦人宣教が公認された。
- (5) 紀元 70 年以降、異邦人信者はユダヤ人と距離を置こうとする。
- (6) 4 世紀以降、異邦人中心のキリスト教に変質していく。
 - ①ユダヤ的ルーツの否定
 - ②ユダヤ人であり続けるなら、救いはないと教え

4. 反ユダヤ主義的キリスト教への変質

- (1) 字義通りの解釈 (Literal interpretation)
- (2) 比喩的解釈 (Allegorical interpretation)
 - ①言葉の意味を、象徴的、比喩的に解釈する。
 - ②その結果、著者の意図とは異なった結論を導き出すことになる。
 - ③アレキサンドリヤの教父であったオリゲネス（185 年頃～254 年頃）が源流。
 - ④彼は、新プラトン主義とキリスト教を結合して、比喩的解釈法を確立した。
 - ⑤これは、字義通りの解釈を否定する「合理主義的解釈」である。
- (3) 中世的 4 重の解釈の例：エルサレムとは
 - ①字義的 (Literal) エルサレム (都)
 - ②道徳的 (Moral) 人の心
 - ③比喩的 (Allegorical) 教会
 - ④類比的 (Analogical) 天国
- (4) アウグスティヌス (354～430) の影響
 - ①ラテン教父とよばれる神学者の一人。
 - ②古代キリスト教世界のラテン語圏において最大の影響力をもつ神学者。
 - ③彼によって、置換神学と呼ばれる神学体系が確立した。
 - *「イスラエル」という言葉を、「教会」と解釈した。
 - *メシアを拒否したイスラエルに、教会が取って代わった。
 - *イスラエルに与えられていた約束は、教会が継承した。
 - ④キリスト教は、比喩的解釈と置換神学によって、本来の啓示宗教から逸脱した。

5. 中世以降のキリスト教

- (1) 中世において、キリスト教会は反ユダヤ主義的組織となる。
 - ①ユダヤ人はキリスト殺しの犯人であるとの教え。
 - ②聖地エルサレムを奪回しようとする十字軍の蛮行。
- (2) シスマ：1054年の東西分裂（東方正教会とローマ・カトリック教会）
 - ①教理的理由：聖霊は「父から」流出するか、「父と子から」か。
 - ②政治的理由：西ローマ帝国崩壊後、神聖ローマ帝国下に結集した勢力と、東ローマ帝国（ビザンチン帝国）との戦い
- (3) その後、東方正教会はさらに分裂（キリストの単性論主張）
 - ①東方諸教会（コプト正教会、エチオピア正教会、シリア正教会）
- (4) 西方教会は宗教改革で分裂（16世紀）
 - ①プロテスタンティズムの誕生。1515年、ルターの95カ条の論題
 - ②ツウイングリの改革（チューリッヒ）
 - ③カルバンの改革（ジュネーブ）
- (5) 宗教改革は、救済論（救いの教理）を本来の啓示内容に修正した。
 - ①解釈学の発展が、その背景にある。
 - ②しかし、この宗教改革でさえも、反ユダヤ主義から脱却していない。
 - ③つまり、置換神学の影響から脱却していないということである。

Ⅲ. 的を外したイスラム教

1. イスラム教の歴史

- (1) 7世紀前半、アラビア半島で誕生
 - ①約360の偶像と、12万4千人を超える預言者がいた。
 - ②マホメットは偶像礼拝を嫌った。
 - ③ユダヤ教徒とキリスト教徒に友好的
 - ④後に、敵対的姿勢を取る
- (2) アブラハムの一神教は、イスラム教において復活したとの主張。
- (3) ユダヤ人たちは、キリスト教圏よりもイスラム教圏で安定した生活を営む。

2. 聖典

- (1) コーラン（クルアーン）
 - ①神（アッラー）がおおよそ20年にわたってマホメットに与えた啓示。
 - ②彼の死後、人々が記憶していたものを結集し、定本確定。
- (2) スンナ（マホメットの言行録）

- (3) ハディース (伝承)

3. コーランは難解

- (1) イスラム教徒にとっては、神の永遠なることば
- ① イスラム教の基本は「神への服従」、「コーランのことばに従うこと」
 - ② 物語性がない。歴史的背景が分らないと、理解できない。
 - ③ 旧新約聖書の知識を前提としている。
 - ④ 矛盾と思われるような箇所が多い。
- (2) 基本内容
- ① 信条：神、罪、救い、死後の裁き、天国と地獄
 - ② 倫理：行動原理
 - ③ 法的規範：神に対するものと、人間に対するもの

4. 救いの教理の比較

- (1) ユダヤ教
- ① ユダヤ人 (アブラハムの子孫) であれば救われているとの共通理解がある。
 - ② 律法を遵守することで、天国の位を確保できる。
- (2) キリスト教
- ① ヨハネの福音書 3 章 16 節
 - ② 神の側の責任
 - ③ 人間の側の責任
 - ④ 信仰により、恵みによって救われる。
 - ⑤ キリスト教は、私たちに何を与えてくれるのか？
 - * 安心して死ぬ。ということは、安心して生きることができる。
 - * キリスト復活の可能性は 97 パーセント
(オックスフォード、リチャード・スワインバーン教授)
- (3) イスラム教
- ① 業による救い (イスラムの支柱)
 - * 信仰告白 アッラーのほかには神はなく、マホメットはその使徒である。
 - * 礼拝 日に 5 回神を礼拝する。
 - * 喜捨 貧困者への施し
 - * 断食 第 9 月、ラマダン月は、日の出から日没まで断食する。
 - * 巡礼 一生に一度はメッカを巡礼する。
 - ② ジハードで殉教すると、パラダイスに行ける。

5. 啓示宗教の現代的課題

(1) イスラエル建国は衝撃的な出来事

①ユダヤ教にとっては、ヤハウエの約束の成就

②キリスト教にとっては、さまざまな受け止め方がある。

*カトリック教会は、自らの歴史と神学の見直しを迫られている。

*教会に最終的な権威がありという教えのために、作業は困難を極める。

*プロテスタントのリベラル派は、ユダヤ人による侵略と見る。

*福音派は、これを聖書預言の成就と解釈する。

③イスラム教は、後に出たものほどよいとする。

*米国帝国主義と、シオニストは、イスラム教徒の敵である。

*イスラム教原理主義革命とは、イスラム教を統治原則とする革命である。

*イスラム原理主義運動：民主主義は、神を冒瀆するもの。

*世俗化したイスラム社会の変革

④イスラム教においては、宗教と政治はイコールである。

*マホメット一代で大事業が完成したという特徴がある。

(2) イエスを信じるユダヤ人の出現 (メシアニック・ジュー)

①ユダヤ教にとっては、衝撃的な現象。

*世界中で15万人前後。約1パーセント。

*イスラエル国内では、7千人前後。約0.1パーセント。

*この現象は、ユダヤ教の啓示宗教への回帰と理解すべきである。

*ユダヤ教は脱線しているが、最終的には復帰する。

②キリスト教にとっては、置換神学の再吟味を迫る現象。

*キリスト教は片肺飛行であるが、なくなっていた別の肺が戻りつつある。

*カトリックとユダヤ教徒との和解が進展しつつある。

*イスラエル国会で、「キリスト者同盟会議」設立。

*ネタニヤフ首相は、親キリスト教の立場。

*中東問題は、ユダヤ・キリスト教的世界観とイスラム教的世界観の対立の様相を深めている。

(3) イスラム教はカルト。光の部分と、闇の部分を合わせ持つ。

*ダール・アルイスラム：イスラム教支配下の地域

*ダール・アルハルブ：戦争を行なうべき地域

*ダール・アルアフ：条約下の地域

*武力による勢力拡大が、イスラム教生成期からDNAのように存在する。

*イスラエル抹殺は、アラーの名誉回復の戦い (ジハード)。

IV. イスラエルの祭りとメシアの働き (レビ記 23 : 1~21) (春の祭り)

イントロダクション

- (1) レビ記 23 章の 7 つの主の例祭 (時間順に並んでいる)
- (2) 春の例祭は 4 つ (50 日の間にやってくる) : メシアの初臨
- (3) 中間期は約 4 ヶ月 : 今の時代
- (4) 秋の例祭は 3 つ (2 週間のためにやってくる) : メシアの再臨
- (5) 3 つは巡礼祭 (荒野、シロ、そしてエルサレムで祝われた)
- (6) これらは、メシアの働きの預言となっている。
- (7) 安息日の重要性 : 自由の民であることのしるし
- (ILL) ユダヤ教のラビのコメント。最も重要な祭りとは安息日。

1. 過越の祭り (出エジプト 12 : 1 ~13 : 16)

- (1) 最初の過越の祭り
 - ①この月が年の始まり。「アビブの月」、バビロン捕囚以降「ニサンの月」
 - ②イスラエル国家の誕生を記念する祭
 - ③10 日に子羊かヤギのうちから傷のない 1 歳の雄を取り、14 日まで吟味。問題がなければ、夕暮れにほふり、その血を門柱とかもいに塗る。
 - ④その肉を焼いて食べる。種なしパン、苦菜。
 - ⑤腰の帯を引き締め、足に靴をはき、手に杖を持って食べる。
 - ⑥血を塗ること、急いで食べることは、1 度限り。
- (2) それ以降の過越の祭り
 - ①国家誕生の記念
 - ②出エジプトの出来事への参加
(ILL) ハガダーの発展
 - ③契約の民としての自己認識の確認
- (3) 預言的意味
 - ①バプテスマのヨハネの証言 (ヨハネ 1 : 29)
 - ②ニサンの月の 10 日 (日) にエルサレム入場 (棕櫚の聖日)
 - ③14 日 (木) まで監視
 - ④15 日 (金) の午前 9 時に十字架につけられる。
 - ⑤最後の晩餐は過越の食事であった。
 - ⑥聖餐式を通して、十字架の出来事を追体験する。

2. 種なしパンの祭り

- (1) 内容

- ①過越の祭りは1日で終わる。その翌日から7日間。
- ②新約時代になると、過越の祭と同じ祭りのようになる (マタイ 26:17)。
- ③出エジプトの夜の出来事を思い出す。
- ④初日と最後の日が、特別な日。いけにえを捧げ、労働を休む。

(2) 預言的意味

- ①「パン種」: 罪の象徴 (I コリント 5:7~8)
- ②キリストが罪のない血を捧げたときにこの祭は成就した。
- ③私たちの心からパン種を取り除く方法 (I ヨハネ 1:9)。

3. 初穂の祭り

(1) 内容

- ①月日は指定されていない。
- ②過越の祭りの後に来る最初の安息日の翌日 (週の初めの日、今日曜日)
- ③荒野で祝うのは不可能。約束の地に入ってから祭りの。
- ④収穫の初穂の束を祭司のところに持ってきて、祭司はそれを主に向かって揺り動かした。
- ⑤大麦の初穂のこと。
- ⑥大麦の束とともに、全焼のいけにえ (1歳の雄の子羊)、穀物の捧げ物、注ぎの捧げ物 (ぶどう酒) などが捧げられた。

(2) 預言的意味

- ①キリストの復活を予表している。
- ②キリストは過越の祭の日に十字架に付けられた (金曜日)。
- ③翌日は、安息日 (土曜日)。
- ④その翌日は週の初めの日で、初穂の祭の日 (日曜日)。この日に、復活した。
- ⑤3日目とか、3日3晩とかいうのは、このことである。
- ⑥パウロの教え (I コリント 15:20~23)
 - *キリストは眠った者の初穂として死者の中から甦った。
 - *アダムは死をもたらした。
 - *キリストは死者の復活をもたらした。
 - *復活には順番がある。

4. 7週の祭り

(1) 内容

- ①ヘブル語で「シャブオット」、ギリシヤ語で「ペンテコステ」。

- ②初穂の祭りから 50 日後の日曜日 (週の初めの日)。
- ③10 分の 2 エパ (4.4 リットル) の小麦粉で 2 つの初穂のパンを焼く。
- ④パンと、全焼のいけにえ、穀物の捧げ物、注ぎの捧げ物を献げた。
- ⑤パン種を入れて焼いたパン。祭壇で焼かず、主に向かって揺り動かした後、祭司の取り分となったから。
- ⑥ 3 つの巡礼祭の一つ

(2) 預言的意味

- ①教会の誕生を予表している。
- ②聖霊の降臨 (使徒の働き 2 : 1~4)
- ③救済史における新しい時代の到来
- ④聖霊の時代 ((父なる神が、御子イエスを通して、聖霊を送ってくださる時代)
- ⑤教会時代 (教会の存在は、旧約聖書に預言されていなかった。奥義である)
- ⑥ 教会の本質 (エペソ 2 : 11~16、3 : 6)
- ⑦ 2 つのパンの意味
パン種—罪—を持ったユダヤ人と異邦人とが、キリストにあって罪清められ、一つの人とされる。

V. イスラエルの祭りとメシアの働き (秋の祭り)

はじめに : 中間の 4 カ月

(1) 内容

- ①春の 4 つの例祭と、秋の 3 つの例祭の間の中間期 (レビ 23 : 22)
- ②収穫の時、畑の隅まで刈り取らない。落穂を残しておく。
社会的弱者 (貧しい者、在留異国人) を救済するため。「わたしはあなたがたの神、主である」とは、この命令が契約関係に基づくものであることを表わしている。

(2) 預言的意味

- ①キリストの初臨と再臨の間の時代 (教会時代) を予表している。
- ②キリストの再臨の前に、中間期として世界宣教の時代が与えられている。
- ③ヨハネ 4 : 35 の意味
ここで語られている 4 ヶ月とは、春の収穫から秋の収穫までの期間のこと。
この夏の期間でも、「畑は色づいて、刈り入れるばかりになっている」。

5. ラッパの祭り

(1) 内容

- ①第7月（ティシュリ）の第1日。第1日は「新月の日」。
- ②第7の月は、安息月であり、その新月の日は特に重要な日と見なされた。
- ③この日に、ラッパ（角笛）を吹き鳴らす。
- ④「聖なる会合」とは、特別ないけにえを捧げる日という意味。
- ⑤この日には、どんな仕事も禁じられた。
- ⑥火による捧げ物が主に捧げられた（具体的には民 28 : 11~1、29 : 1~6）。

(2) 預言的意味

- ①ラッパの祭りは、教会の携挙を予表している。
- ②クリスチャンたちは、ラッパの音とともに天に引き上げられる。
- ③これが、教会時代の終わりに起こる出来事である。
- ④ I テサ 4 : 13~18
特に 16 節では「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、…」とある。
- ⑤ I コリ 15 : 50~58
特に 51~52 節では「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです」とある。
- ⑥ 4ヶ月の中間時代（世界宣教の時代）の後には、教会の携挙がやってくる。
テサロニケのクリスチャンたちは、このことによって慰めを得た。

6. 贖罪の日

(1) 内容

- ①第7の月（ティシュリ）の10日。つまり、9日の日没から10日の日没まで。
- ②この日には特別な献げ物が献げられる（レビ記 16 章）。
2頭のヤギ： アザゼルのため、主のため
- ③贖罪の日の献げ物は、イスラエルの民全体の罪を贖うためのもの。
- ④贖罪の日の儀式は、毎年イスラエルの民を清め、また幕屋を清めた。聖なる神と特別な契約関係を再確認。
- ⑤この日の特徴は、「身を戒める」ことにあった。つまり、「断食」をするということ。贖罪の日は、「祝いの日」ではなく、苦悶の日。
- ⑥贖罪の日は、ユダヤ人たちにとっては最も厳粛な日、神の前に悔い改める日。
（例話）1973年の第4次中東戦争（ヨムキップール戦争）

(2) 預言的意味

- ①贖罪の日は、教会の携挙に続く大患難時代を予表している。

- ②大患難時代が来ると、イスラエルの民は肉体的にも霊的にも、苦難を経験するようになる（ゼカリヤ12：1～9）。
- ③大患難時代の最後に、イスラエルの民の国家的救いが実現する。
- ④イスラエルの救いは、キリストの地上再臨のための前提条件である。
- ⑤贖罪の日の成就是、イスラエルの民の苦悶と、それに続く国家的救いの中にある。（ゼカリヤ12：10～13：1、ホセア6：1～3）

7. 仮庵の祭り

(1) 内容

- ①巡礼祭の一つ。第7の月の15日が、仮庵の祭りに当たる。
- ②7日間の祭りであるが8日目も加わり、この日にも労働をしてはならないと命じられた。
- ③祭りの期間、特別ないけにえが捧げられた（民数記29：12～34参照）。
- ④雄牛は合計70頭献げられた。
古くからラビたちは、その70頭は、ノアの子どもたちから派生した70の異邦人の国々（創世記10章）を象徴していると解釈していた。
- ⑤祭りの期間、仮庵に住むようにと命じられている。
仮庵を作るための材料は、美しい木の実、なつめやしの葉、茂り合った木の太枝、川縁の柳だった。今では、「美しい木の実」としてシトロネと呼ばれる柑橘類が、「なつめやしの葉」としてルラブと呼ばれる植物が、「茂り合った木の枝」としてミルトスが、「川縁の柳」としてアラバアと呼ばれる植物が使われている。
- ⑥この祭りの目的は、荒野の旅を記念するため。
- ⑦今でもイスラエル人たちは、この仮庵の祭りを祝っている。

(2) 預言的意味

- ①仮庵の祭りは、メシア的王国（千年王国）を予表している。
- ②キリストの地上再臨の後、千年王国が地上に設立された時仮庵の祭りは成就する。
- ③そういう意味で、仮庵の祭りは喜びの祭り（ゼカリヤ14：16～19）。
- ④異邦人の国々も、エルサレムに上って来てこの祭りを祝うようになる。
- ⑤主イエスもまた、この祭りを祝っている。
（ヨハネ7：1～10：21は、その間のイエスの活動を記したもの）
- ⑥仮庵の祭りは、旧約聖書の預言のクライマックスである。

終わりに（終末思想）

1. ユダヤ教

- (1) メシアの到来と、メシア的王国の建設 (千年王国)
- (2) メシアとは、個人なのか、「時代」なのかで見解が分かれる。

2. イスラム教

- (1) イスラム教のメシアは「マハディ (神に導かれた人)」。
- (2) マハディの出現によって、世界は終末戦争に入り、イスラム教徒が勝利する。
- (3) シーア派は、第12代イマームがメシアであると信じる。「12イマーム派」。
- (4) イランのアフマディネジャド大統領は、この終末観に立っている。
 - ①今こそ、その時
 - ②教育の分野：学校の教科書
 - ③核兵器の開発：MAD (Mutual Assured Destruction) が通用しない。

3. キリスト教

- (1) 歴史とは、ヤハウェなる神が有限な空間と時間に介入された記録である。
- (2) クリスマスが歴史を読み解く原則は、アブラハム契約である。
- (3) ユダヤ人の国の再建は、アブラハム契約の部分的成就である。
- (4) 患難時代 (黙示録) は、アブラハム契約の残りの部分の成就につながる。
- (5) 患難時代とハルマゲドンの戦い、そして、ユダヤ人の回心
- (6) メシアの再臨と地上に成就する「神の国」 (メシア的王国、千年王国)
- (7) イザヤ書 19:23~25 の預言は、この時に成就する。

「その日、エジプトからアッシリヤへの大路ができ、アッシリヤ人はエジプトに、エジプト人はアッシリヤに行き、エジプト人はアッシリヤ人とともに主に仕える。その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真中で祝福を受ける。万軍の主は祝福して言われる。『わたしの民エジプト、わたしの手でつくったアッシリヤ、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように』」

- (8) その先に、新しい天と新しい地の約束がある。